

待兼山俳句会

第六百九十六回

世話人

山田安廣・上田恵子・鈴木輝子・根来眞知子
東中 乱・向井邦夫・森 茉衣

令和七年一月二十日（月）

会場 大阪倶楽部 会議室

締切 午後二時

出席者

瀬戸幹三・山戸暁子・上田恵子・小出堯子・鈴木輝子・鈴木兵十郎・西川盛雄・根来眞知子
東中 乱・東野太美子・向井邦夫・森 茉衣・山田安廣

投句者

碓井遊子・西條かな子・寺岡 翠・中嶋朱美・中村和江・平井瑛三

以上出席者十三名＋投句者六名 計十九名

兼題

春待つ・凍蝶（幹三） 食積（喰積も可）・冴ゆる（暁子）

当季雑詠 通じて八句

次回

例会 令和七年二月十七日（第三月曜日） 会場 大阪倶楽部会議室 締切 午後二時

兼題 春浅し・恋猫（幹三） 落の臺・猟名残（暁子） その他当季雑詠

選者吟

ベランダに春待つ椅子を出しにけり 幹三

凍蝶の汚れし翅を持て余す

水底に春待つものの眼のありぬ

冴ゆる夜や旅に果てたる人思ふ

暁子

食積や母の段取りよき厨

凍蝶の触るれば飛べる力見せ

幹三 選

春待つや鯉釣竿の並ぶ川

せせらぎの勢ひゆるみ春を待つ

◎凍蝶の野菜と藁の間に居たる

切通し踏み入る一步風冴ゆる

春待つや種蒔く土を整へつ

マネキンのみな華やぎて春を待つ

◎凍蝶のそれでも高く飛ばむとす

冴ゆる夜は好きな歌聞くひたすらに

喰積の家紋に父母の声を聴く

太腿のやうな根を張り春を待つ

冴ゆる夜や旅に果てたる人思ふ

◎喰積のととのひ冴ゆるびけり

白き月西に残して朝の冴

◎喰積を詰める二人の冴かな

植木屋の缺の音の冴ゆる庭

春待つや他家の庭木を見る散歩

待春の光一條戸の隙間

産休を終ふ春を待つ母も子も

兵十郎

茉衣

邦夫

乱

安廣

瑛三

輝子

かな子

乱

暁子

暁子

輝子

兵十郎

安廣

邦夫

邦夫

暁子

輝子

◎凍蝶の終の力を風攫ふ

春待つや風の隙間に眠る猫

神戸今日震災の日ぞ月冴ゆる

食積や家族写真を撮る娘

◎きのふけふ変はりはなくて春を待つ

冴ゆる夜や我が身抱きしめねむらむか

◎食積の見事に捌けてみな達者

待春やあの木この木と庭巡る

おしやれして楽しみたいの春を待つ

食積の膳に家族の箸集ふ

凍蝶や三尺飛びて地に伏せり

畝端に凍蝶見付け鋤かで置く

凍蝶やお大師さまの座り石

太美子

兵十郎

翠

邦夫

邦夫

眞知子

かな子

太美子

眞知子

盛雄

兵十郎

邦夫

兵十郎

幹三 特選句講評

・凍蝶の野菜と藁の間に居たる

邦夫

おや、こんな所にといい発見がそのまま句になりました。柔らかく暖かい場所にひっそりという小さな生き物を愛おしむ心が伝わってきます。優しいですね。

・凍蝶のそれでも高く飛ばむとす

輝子

「それでも」という措辞に凍蝶の状況が語られています。省略がよく効いているということです。ひ弱な蝶をじっと見守っている様子・気持ちが伝わります。

・喰積のととのひ厨ゆるびけり

輝子

料理の目途がついた時、ふと台所の空気の緊張が解けたようである、と。ほっと一息つくと同時に正月を迎える気分も盛り上がってくるのです。喰積ならではの表現。

・喰積を詰める二人の厨かな

安廣

この二人はご夫婦なのか親子なのか。笑いやおしゃべりにも華やいだ雰囲気伝わってきます。「二人の厨」という切り取りに感心しました。

・凍蝶の終の力を風攫ふ

太美子

「終の力」が秀逸。凍蝶という季語の中には小ささ・弱弱しさ・儚さが含まれています。それを受けての中七・下五。十二分に対象が描かれました。

・きのふけふ変はりはなく春を待つ

邦夫

そうかんたんに春はやって来ません。どっしりと大きく構えた様子がたいへん好ましい。春は必ず来るから、という大人の呟きのような句。

・食積の見事に捌けてみな達者

かな子

「食積み」は「食積」とした上でいただきました。おめでたさがにじみ出ているではないですか。お節料理に込められた願い通りです。「み」が繰り返されるリズムも楽しいです。

暁子 選

◎堂冴ゆる龍の睨みに追ひ出され

眞知子

食積や母の味継ぐ姉と吾

兵十郎

春を待つ書斎の窓の鉢植と

乱

◎凍蝶の終の力を風攫ふ

太美子

喰積のととのひ厨ゆるびけり

輝子

◎風冴ゆるとも月見たし星見たし

太美子

◎首塚の雪しんしんと観心寺

盛雄

待春の日々やりハビリ励みをり

翠

凍蝶やお大師さまの座り石

兵十郎

かすかなる霜の音聞く冴ゆる夜

眞知子

喰積の箸の迷はず好物へ

乱

凍蝶の一寸日ざしのある方へ

とある枝終の住処か凍蝶の

凍蝶の野菜と藁の間に居たる

一本の噴煙冴える阿蘇の峯

おしやれして楽しみたいの春を待つ

冴ゆる夜や我が身抱きしめ眠らむか

◎羽たみ凍蝶夢の中を飛ぶ

産休を終ふ春を待つ母も子も

春待つや他家の庭木を見る散歩

凍蝶よ我は再び飛びたたむ

禅寺や龍の目冴ゆる天井画

春待つや風の隙間に眠る猫

畝端に凍蝶見付け鋤かで置く

◎空の青海の青背に水仙郷

凍蝶や三尺飛びて地に伏せり

食積の見事に捌けてみな達者

神戸今日震災の日ぞ月冴ゆる

輝子

乱

邦夫

盛雄

眞知子

眞知子

眞知子

輝子

邦夫

翠

瑛三

兵十郎

邦夫

茉衣

兵十郎

かな子

翠

暁子 特選句講評

・堂冴ゆる龍の睨みに追ひ出され

眞知子

作者のお住まいからしてこの「八方睨みの龍」は京都の天龍寺か。広くて暗い堂内の寒さは厳しく、眼光鋭い龍に睨まれ早々に退出した作者。まるで龍に追い出されたようだと感じられたのが面白い。

・凍蝶の終の力を風攫ふ

太美子

何とも哀れな蝶の姿。最後の力を振り絞って飛び立とうとした瞬間に寒風の一撃。蝶は種類によって成虫のまま越冬するものもあるようだが、もしその種類ならそこに留まって越冬してくればよいが。

・風冴ゆるとも月見たし星見たし

太美子

冬の空気は乾燥し澄んでいるので、月や星が一段と美しく輝いて見える。寒風が月や星を磨くという表現をよく見る。風が冷たいので室内から窓越しに見るのであるが、やはり外に出て仰ぎたい作者。リフレインで強い気持ちを表現された。

・首塚の雪しんしんと観心寺

盛雄

南北朝時代に活躍した楠木正成の菩提寺である河内の観心寺。神戸の湊川で敗れた正成の首が観心寺に送られ、この寺で首塚として祀られている。観心寺は周りを大樹に囲まれ、その中に埋もれているような感じの寺であるが、その境内の山中にある首塚に雪が静かに降り積もっている景。遠路九州からご参加下さった方のお作だったので驚いたが、ご出身は関西なのだろう。

・羽たたみ凍蝶夢の中を飛ぶ

眞知子

蝶の翅は人間の脚と同じだ。脚萎えた人間ももう行くことの出来ぬ地や見ることの出来ぬ山河を夢の中で旅する。

・空の青海の青背に水仙郷

茉衣

一読、若山牧水の「白鳥はかなしからずや空の青海の青にも染まらずただよふ」を思い出す。これも本歌取りというのであろうか、元歌の愁いとは真逆の明るい晴れ晴れとした大景を描かれた。淡路島の水仙郷か。

*「春待つ」の句が特選句になかったことに気づいた。

「春待つ」は一月の季題である。一月の末になってもまだまだ寒い日が続く。そのような中で人や自然がひたすら春の到来を待つ気持ちを詠むのがこの季題の本意で、実際に春らしくなったという気持ちや景を詠むのは早過ぎるだろう。今日の句はその点はどれも心得て詠まれていると思う。

互選三句

朱美 選

通夜の客去りて深閑星冴ゆる

輝子

ベランダに春待つ椅子を出しにけり

幹三

食積の膳に家族の箸集ふ

盛雄

自分もその場に居るような楽しさを感じた。

瑛三 選

荒海や春の待たるる能登の里

安廣

新年会妻の千代紙席標に

乱

食積みの見事に捌けてみな達者

かな子

元気で正月を過ごされた様子を活写。

和江 選

凍蝶の墓原悼む田原坂

盛雄

凍蝶の一途日ざしのある方へ

輝子

神戸今日震災の日ぞ月冴ゆる

翠

三十年、再生神戸は遠くなりです。

かな子 選

木枯らしが角曲りゆくシャッター街

盛雄

凍蝶の触るれば飛べる力見せ

暁子

食積や母の段取りよき厨

暁子

日本の古き良き暮らしぶりが何とも懐かしい一句。

邦夫 選

冴ゆる夜や旅に果てたる人思ふ

暁子

羽根たたみ凍蝶夢の中を飛ぶ

眞知子

待春やあの木この木と庭巡る

太美子

公園や邸宅の庭の木の微妙な変化を見つつ春を待つ。

恵子 選

冴ゆる夜や星こぼれ落つかそけき音

眞知子

凍蝶や命のバトン渡し終へ

堯子

凍蝶よ羽根美しきまま君逝くや

翠

親しい人と別れた気持ちは私と同じ。美しい表現です。

堯子 選

石鹼の四隅丸まり春を待つ

幹三

通夜の客去りて深閑星冴ゆる

輝子

空の青海の青背に水仙郷

茉衣

一面の水仙の白と黄が、牧水の「白鳥」の如く鮮やか。

太美子 選

水底に春待つものの眼のありぬ

幹三

凍蝶の触るれば飛べる力見せ

暁子

ベランダに春待つ椅子を出しにけり

幹三

この椅子にかけて眺める春は？ 読者の想像も膨らむ。

輝子 選

感動の一書読了夜の冴ゆる

暁子

凍蝶やお大師さまの座り石

兵十郎

ベランダに春待つ椅子を出しにけり

幹三

平明な句でありながら、待春の気持ち伝わってくる。

兵十郎 選

冴ゆる屋根歩く鴉の爪の音

幹三

凍蝶よ我は再び飛びたたむ

翠

ベランダに春待つ椅子を出しにけり

幹三

春になったら外に出ようと元気づける人の見える句。

茉衣 選

禪寺や龍の目冴ゆる天井画

瑛三

春待つや風の隙間に眠る猫

兵十郎

春待つや他家の庭木を見る散歩

邦夫

私も散歩道にある他家の庭の樹々を見ることが喜びです。

眞知子 選

荒海や春の待たるる能登の里

安廣

目出たき名詰まる喰積届きたり

翠

凍蝶の野菜と藁の間に居たる

邦夫

野菜の命と藁の温さがしばし凍蝶を守っている。

翠 選

腕相撲子に負けてやり春を待つ

幹三

産休を終ふ春を待つ母も子も

輝子

ベランダに春待つ椅子を出しにけり

幹三

日当たりのいいベランダ。人待ち顔の椅子を出す。

盛雄 選

マネキンのみな華やぎて春を待つ

瑛三

白き月西に残して朝の冴

兵十郎

禪寺や龍の目冴ゆる天井画

瑛三

長野県小布施の北斎の龍の天井画の大迫力を思い出す。

安廣 選

凍蝶のそれでも高く飛ばむとす

輝子

マネキンのみな華やぎて春を待つ

瑛三

友降りて来ませ語らむ月冴ゆる

恵子

月の冴えた夜は友と過ごした日が殊更に思われる。

遊子 選

凍蝶や出会いがあれば別れあり

茉衣

新年会妻の千代紙席標に

乱

春待つや木々薄紅の芽を持ちて

暁子

薄紅色と膨らみの芽に春の気配。観察と観照の一句。

乱 選

凍蝶の野菜と藁の間に居たる

邦夫

喰積や母の段取りよき厨

暁子

ベランダに春待つ椅子を出しにけり

幹三

平明なる表現で春待つ作者と椅子を描いている。

参加者自選句

冴え冴えと満月地上を眺めをり マネキンのみな華やぎて春を待つ 深々と冴ゆる夜空に六惑星 凍蝶をあはれ強しと思ふ吾 春待つや他家の庭木を見る散歩 友降りて来ませ語らむ月冴ゆる 月冴えて光溢れし夜の庭 実千両二十両ほどこぼし活く 喰積のととのひ厨ゆるびけり 春待つや風の隙間に眠る猫 空の青海の青背に水仙郷 冴ゆる夜や我が身抱きしめぬむらむか 待春の日々やりハビリ励みをり 一本の噴煙冴ゆる阿蘇の峯 日の落ちて黄なる凍蝶動かさる 初山河朝市の立つ飛驒の国 死は眠りはたまた夢か蝶凍つる	朱美 瑛三 和江 かな子 邦夫 恵子 堯子 太美子 輝子 兵十郎 茉衣 眞知子 翠 盛雄 安廣 遊子 乱
--	--

ひとこと

山田安廣

明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願い申し上げます。

世相は段々複雑となり不安な政治情勢が続いております。こんな世の中であればある程俳句を考え、鑑賞して心とむ時間を過ごす事が大切なような気がする年明けでございます。

一月二十日、乱さんのお世話で例会当日に新年会を開催しました。盛雄さんが遠く熊本からご参加頂いたり、普段お忙しい眞知子さんもご出席頂いて賑やかに楽しい時間を過ごす事ができました。

なお、今月から会計係が寺岡翠さんから上田恵子さんに交代されましたので、ご報告申し上げます。翠さん長い間有難うございました。お疲れ様でした。恵子さんよろしくお願い申し上げます。

皆様方が今年も益々お元気でご健吟頂きます事を祈り致しております。

